上ヲロウ（かみをろう）・下ヲロウ（しもをろう）遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度06分48秒 東経137度33分59秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　令和2年6月～令和3年1月

調査面積　10,525㎡

担　当　者　鈴木正貴・川添和暁・田中　良・堀木真美子
河嶋優輝・鈴木恵介・宮腰健司・渡邉　峻

調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて、令和２年６月から令和３年1月にかけて実施した。調査面積は10,525㎡で、県道および沢を境に、20A区・20B区・20C区の三区に分けて調査を行った。

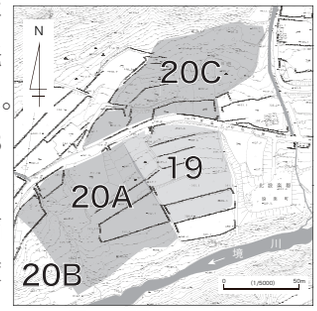

図１　調査区位置図

立地と環境　遺跡は、境川北岸の緩斜面上に立地する。当地には、斜面上方北側から幾筋もの沢が流れ込んで来ており、緩斜面は度重なる扇状地堆積（土石流堆積）の累積によって形成されている。標高は、20A区・20B区で380～400m、20C区で400～410mを測る。

調査の概要　基本層序は、斜面上方の20C区と下方の20A区・20B区とで詳細が異なるものの、概ね上から、第1層：表土および近代以降の盛土・耕作土、第２層：古代から近世の包含層および耕作土（灰褐色および黒褐色あるいは黒色シルトもしくは粘土層）、第３層：縄文時代中期～弥生時代中期の遺物包含層（黒色粘土層および褐色粘土層）、第４層：無遺物層（明黄褐色粘土および礫層・黒色の強い粘土層・灰白色の砂層）、である。第４層は縄文時代前期以前に形成された堆積層で、これより以下からは遺構・遺物を確認することができなかった。当遺跡では、この第４層が堆積そして安定化してはじめて、ヒトの安定的な活動が行われたものと考えられる。確認された、遺構・遺物は下表の通りである。　（川添和暁）

時代・時期	確認調査区	検出遺構	出土遺物	備考
縄文時代中期中葉	20A区	竪穴建物跡1	土器・石器	当地での集落形成の始まり。
縄文時代中期後半～後期前葉	20A区	竪穴建物跡・配石集石遺構・大型土坑（土坑墓主体か）、土器埋設遺構	土器・石鏃・礫器・剥片石核類・磨製石斧・石錘・磨石敲石類・石皿台石類	竪穴住居と埋葬遺構群、配石集石遺構による集落形成。
縄文時代後期前葉～中葉	20C区	竪穴建物跡２以上、大型土坑（貯蔵穴）、柱列	土器・石鏃・打製石斧・礫器・剥片石核類・磨製石斧・磨石敲石類・石皿台石類	竪穴建物と貯蔵穴群による集落形成。
縄文時代後期末～弥生時代前期	20A区 20C区	竪穴建物跡、土器棺墓を含む土器埋設遺構3以上、磨製石斧埋納土坑	土器・石鏃・打製石斧・礫器・剥片石核類・磨製石斧・石冠・岩偶岩版類・石棒石刀類	黒色土中での遺構・包含層形成（集落跡）。
弥生時代中期後葉	20A区	竪穴建物跡5、溝、自然流路	土器（甕・深鉢・壺）、石器（有茎鏃・紡錘車）、管玉、	土石流堆積による集落の保存。竪穴建物の周堤を確認。
古代および中世～近世以降	20A区 20B区 20C区	竪穴状遺構1、掘立柱建物跡2、ピット列、その他土坑、ピット、谷地形内での遺物堆積	陶器（須恵器・灰釉陶器・山茶碗・擂鉢・天目茶碗・その他近世陶器）、土師甕・鍋（伊勢型・内耳）、砥石、銅銭（祥符通宝・洪武通宝・永楽通宝）・鉄滓	20A区北端と20C区で活動痕跡明瞭。20A区北半は、縄文時代の土器を多量に含む古代以降の耕作土が広く展開する。

２０Ａ区

20A区では、遺構および包含層の上には、盛土、耕作土、そして土石流堆積層が広がっていた。調査区北端では、耕作土下から近世の柱穴列を検出した。柱穴列を構成するピットでは柱痕が明瞭に認められ、4基一列の単位で、計2列を確認した。近世の遺構が展開する範囲より南側では、三層の遺物包含層が確認された。一層目は、調査区中央から北側に広がる黒色土(検1のA層)で、縄文時代前期から晩期までの遺物が出土する。遺物は、細片化や摩滅が激しいため、より上位の山からの崩落土である可能性が高い。本層は撹拌気味で、古代以降の遺物も含むことから、後世の耕作土の可能性が高い。二層目は、調査区中央から南側に広がる黒色土(検1のB層)で、縄文時代後期から弥生時代中期までの遺物が出土するが、圧倒的に縄文時代後期から晩期の遺物が多い。上部は摩滅した土器片が多いことから、弥生時代中期後半の土地改変を受けたと考えられる。三層目は、B層下の南側を中心に広がる暗褐色から褐色を呈する包含層で、縄文時代中期・後期の遺構埋土でもある(検2)。縄文時代中期中葉の竪穴建物跡（1112SI）埋土にも同様の堆積があることから、調査区北側にも続いていて、土石流や後世の土地改変により大半は失われたと思われる。

遺物包含層

南側では、土石流堆積層下から弥生時代中期後葉の集落跡が検出され、竪穴建物跡では、周堤が確認された。周堤は建物外周に土手状の高まりとして認められ、その下部は浅い溝状に凹む。遺存状態が良好な1055SIでは、周堤下部の凹みは確認できなかった。また、山側から境川側に向かって建物の外側を巡るように溝が掘られており、結果的にL字あるいはコの字に伸びている。溝は1110SD、1100SD、1075SDの順に更新されていた。集落は、縄文時代の遺物包含層を一部削平して構築されたため、出土遺物は弥生時代の遺物に加えて、縄文時代の遺物が目立つ。竪穴建物跡内よりも溝と周堤から多く遺物が出土した。

弥生時代中期後半

１０３３ＳＩ

1033SIは、西側にある竪穴建物跡で、周堤が1075SDに切られていることから、比較的古い時期に構築されたものと考えられる。時期が分かるような土器片は出土していないが、弥生土器片が周辺で数点確認できていることと、緑色の管玉が1点出土していること、竪穴建物跡の構造が他と共通することから、弥生時代中期後半と考えられる。

１０５５ＳＩ

1055SIは、土石流によって覆われて、特に周堤の遺存状態が良好であったことから、全国的にも貴重な調査事例となった。この竪穴建物跡は、3面以上にもわたり床面が更新され、それぞれの床面に地床炉が伴う。その最新床面からは、弥生時代中期後半の甕が5点出土している。これらの土器はいずれも外面に煤が付着していた。図５の3はほぼ完形の小形の台付甕である。図５の5は文様と底部の布目圧痕から、栗林式の影響をうけた南信地方の土器である可能性が高い。図５の１・２は、口縁部が逆さまの状態で埋められていた。また、これら土器の他にも石製紡錘車2点（図６の６・７）、円盤状の石器2点（図６の８・９）、磨製石斧2点などが出土した。土器の出土したやや西よりの範囲で、炭化物が集中している。周堤は、数段階に分けて構築されたと考えられ、周堤の下部と上部の中間で甕がまとまって出土し、焼土を含む土坑が検出された。さらに、この竪穴建物跡に先行する形でもう一回り大きな竪穴建物跡1285SIも検出された。

１０６５ＳＩ

1065SIは、1055SIの次に遺存状態が良好で、周堤は凸状の高まりが山側の一部に残存していた。これも1055SI同様2回以上床面を更新しており、それに伴う地床炉が検出された。遺物はあまり出土していない。周堤は土手状の高まりとして認められたが、その下部は浅い溝状に落ち込む。また、この竪穴建物跡の下層から、ほぼ重複する位置で、縄文時代中期後半と考えられる地床炉を伴う竪穴建物跡も検出された。

縄文時代後期・晩期

弥生時代中期後葉の集落跡の下には、縄文時代後期末～晩期（弥生前期含む）と、縄文時代中期後半～後期前葉の遺構群が展開する。縄文時代後期末～晩期では1329SKのような突帯文土器（五貫森式古段階）を棺身とする土器棺墓のほか、1114SJのような後期末の土器埋設遺構も認められる。これらはB層とした黒色土包含層中で形成されていた。

縄文時代後期前葉の遺構としては、竪穴建物跡と大型土坑、配石遺構、土器埋設遺構などが検出された。竪穴建物跡は、配石遺構の下層から検出されていることから、竪穴建物跡が廃絶したのち、黒色土の形成途中で配石遺構群が構築されていることがわかった。1549SIからは、土器が何重にも重なって埋められた土器埋納炉が検出されている。図3の北西では、大型土坑のまとまりが確認でき、これらは、浅く焼土もないが、焼けた石を含む配石の確認できる土坑もある。土器埋設遺構は、1209SKや1253SKのように立位のものが多いが、1300SZのように横位で検出されたものもある。

配石遺構は、調査区東側、特に1055SIの周堤付近は残りが良好だった。1065SIやその周辺でも礫が点在し、礫の集中部を検出できることから、本来は東側一帯に配石遺構群が展開していたのが、弥生時代の集落形成によって一部攪乱された可能性がある。礫は、片麻岩や花崗岩が主体で構成され、焼けた石はほとんどない。角礫から亜角礫を主体とするが、大きさは多種多様で、統一性は感じられない。また、石核・原石と考えられる安山岩や磨石などが少量含まれる。

縄文時代中期後半

縄文時代中期後半は、石囲炉を伴う竪穴建物跡3棟、地床炉を伴う竪穴建物跡3棟が検出された。竪穴建物跡は、いずれも壁柱穴列をもつことで共通している。1152SIの石囲炉は、側面だけでなく底面にも平たい石が敷かれ、炉の内側には大型の土器片が敷きつめられていた。また、底面では少量の焼土と、埋土を何回か掘り返した状態が確認された。このことから土器敷は石囲炉の機能終了段階で行われたものと考えられる。

縄文時代中期前半

1112SIは縄文時代中期中葉まで遡る竪穴建物跡である。構造は、中央に地床炉をもち、壁柱穴列が巡る。中期中葉の北屋敷式の土器片や剥片、台石などが出土している。

A区まとめ

今年度の調査では、設楽ダム関連の発掘調査で初めて弥生時代の集落跡が検出された。特に、周堤の残る竪穴建物跡と、そこから出土した土器群と紡錘車や磨製石斧などの石器の組み合わせは、その時期を表す一括資料として貴重な事例となった。また、竪穴建物跡と溝など集落の構造も把握できる調査となった。

昨年度検出された縄文時代晩期の遺構は、今年度では突帯文土器の埋設遺構以外は把握できなかったが、その遺構埋土でもある黒色土(検1B層)からは遺物が出土したため、A区にも活動の痕跡があることを確認することができた。後期は、竪穴建物跡と土器埋納炉の居住としての利用と、大型土坑や配石遺構群、土器埋設遺構などの祭祀の場が時期差もなく近接した形で営われることを確認出来た。

20B区

20B区では、土石流と後世の削平を受けた堆積層の下から、砂層の堆積による緩斜面が調査区中央で検出され、そこから大きな落ち込みが1基と数点の遺物が検出された。この砂層は、20A区に伸びているものと考えられ、20A区の方が少し低くなっている。20A区西端に検出された1001NRは、この調査区では検出できていない。北端には近代の石垣があり、その裏込めの下には近世以降の造成土が検出された。この北端付近には、元文元年に書かれた「川向村絵図」に社の記載があるため、ここより西にその社があったと思われる。以上、20B区では、縄文時代と考えられる人々の活動の痕跡をわずかだが確認することができ、近世以降は北端に造成による平坦面を作り出していることがわかった。（田中　良）

図２　20A区南側弥生時代中期後葉の集落跡（S=1/300）

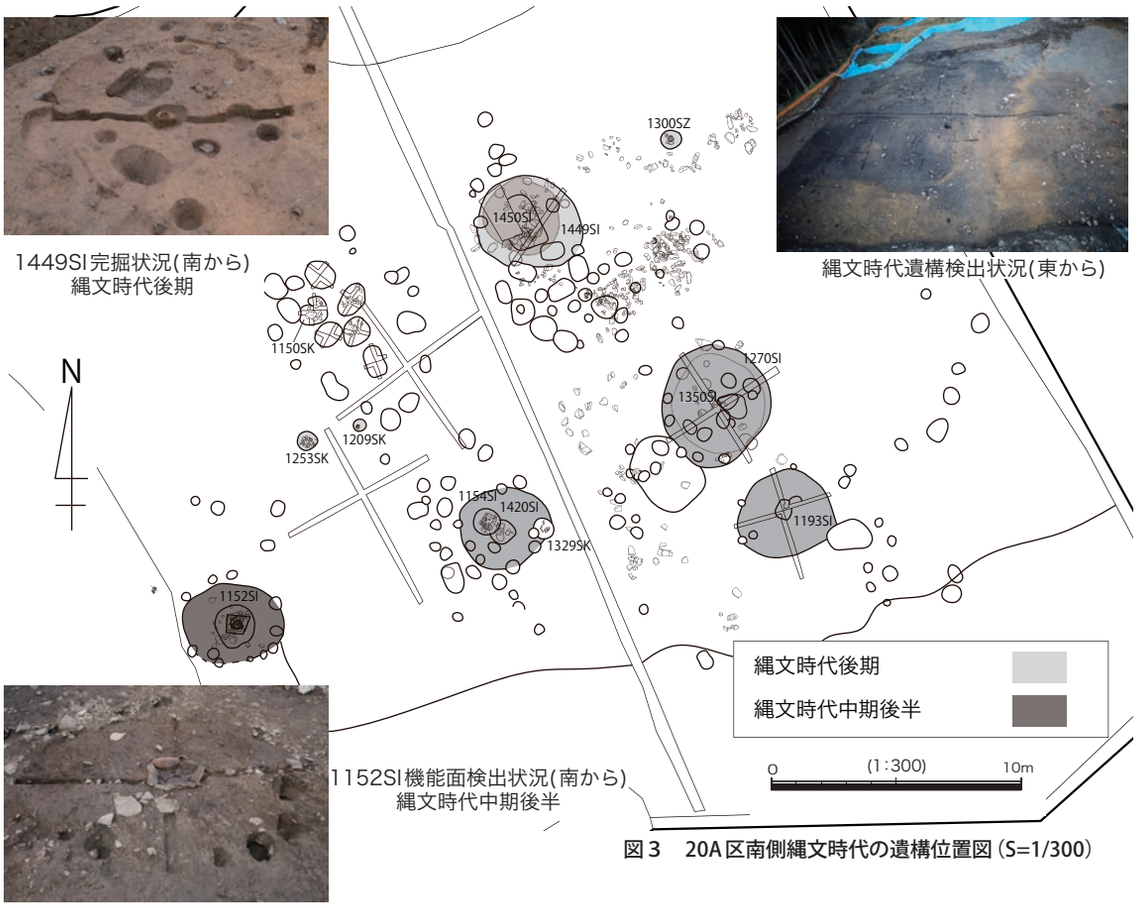

図３　20A区南側縄文時代の遺構位置図（S=1/300）

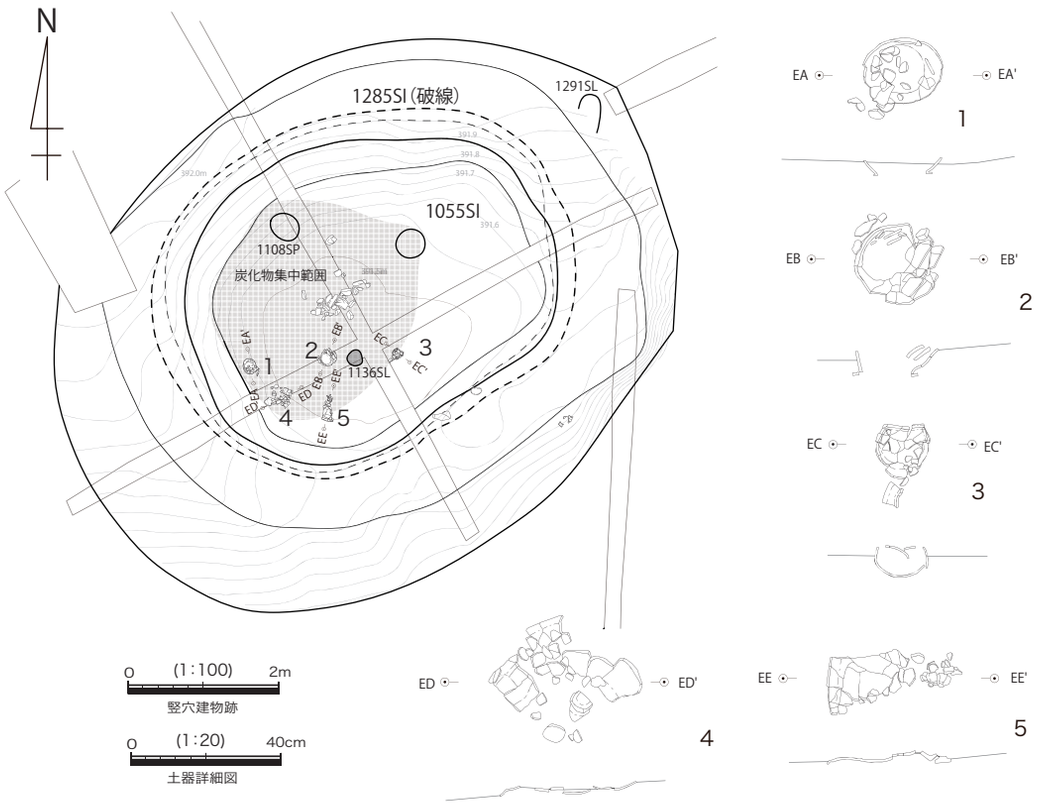

図４　1055SI遺構平面図（S=1/100）

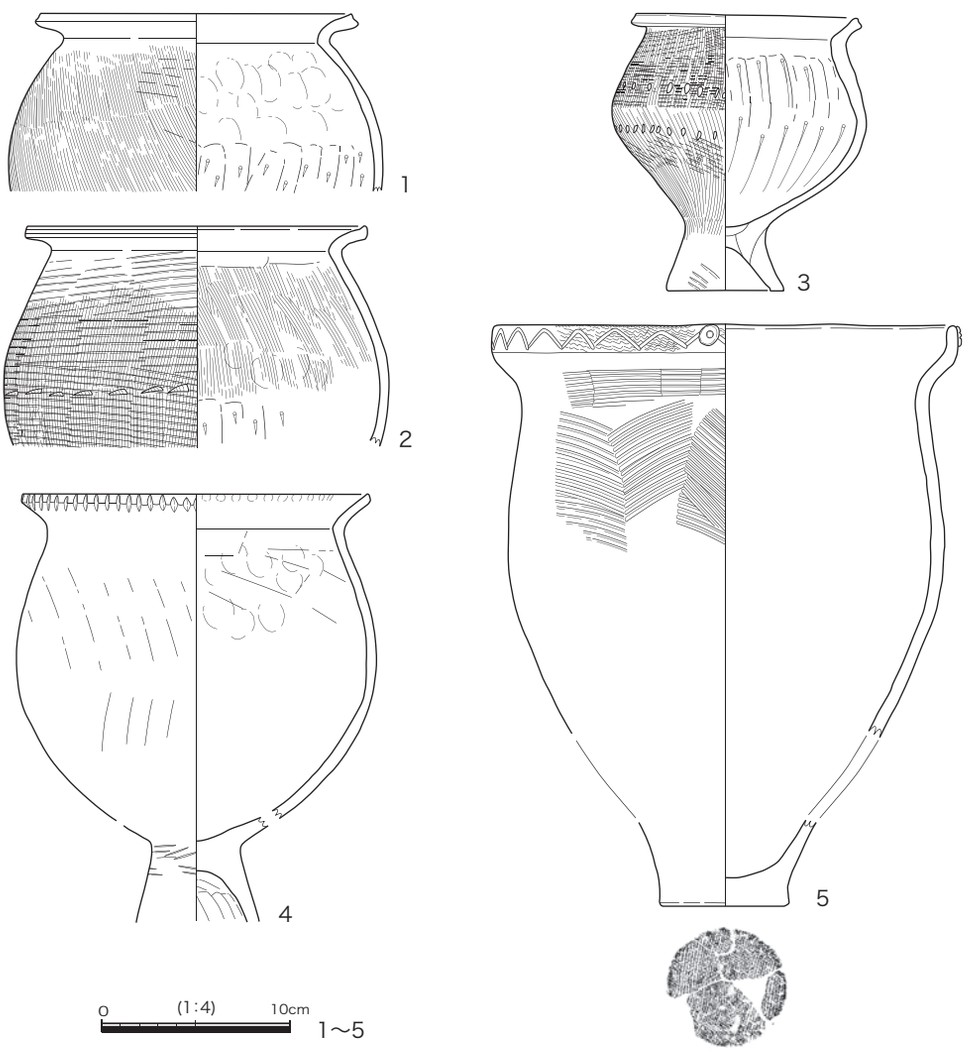

図５　1055SI出土遺物１

1055SI機能面検出状況(南から)

1055SI土器出土状況(南西から)

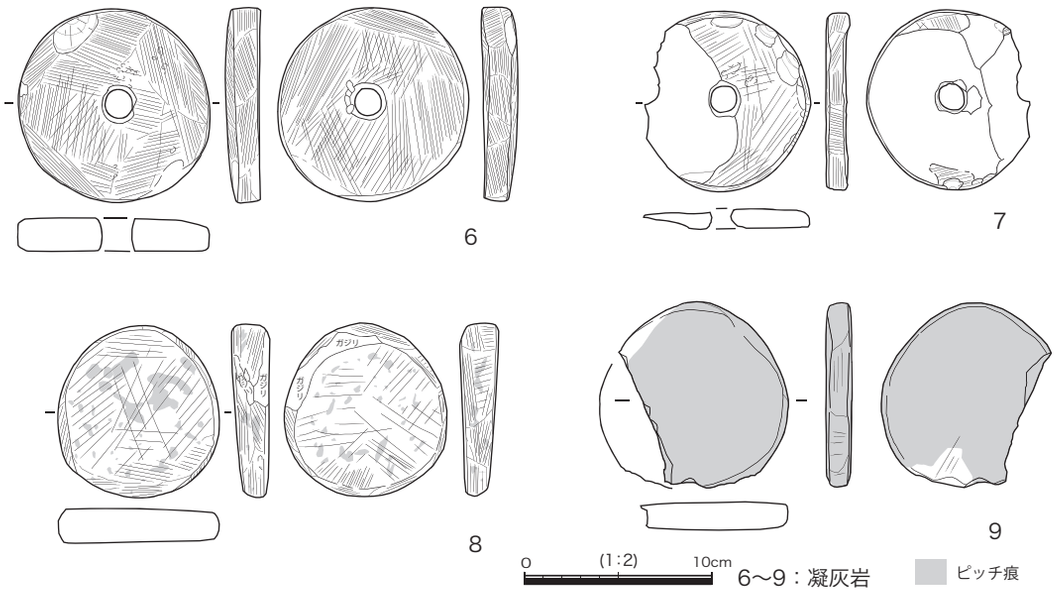

図6　1055SI出土遺物2

2093SI(南から)

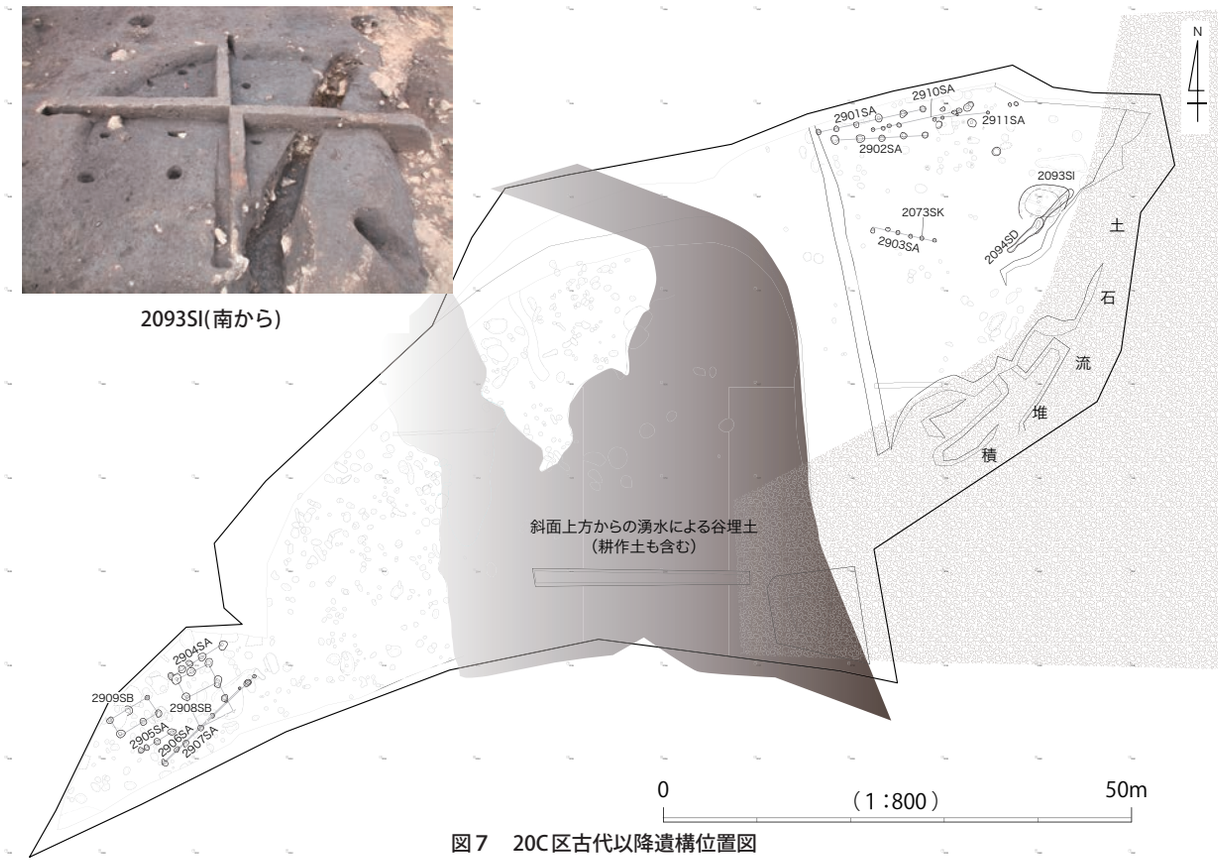

図7　20C区古代以降遺構位置図

２０Ｃ区

20C区は、県道北側に設定された調査区である。調査区外北側の斜面上方から、湧水による作用もあり、中央部分は浅い谷地形の景観を呈する。遺構・遺物の保存が良好であったのは、調査区北東側と西端の範囲であった。特に、調査区東側の区域では、古代以降の遺構・遺物と縄文時代の遺構・遺物とが層位的関係をもって確認された。（川添和暁）

古代以降竪穴建物跡

2093SI・2597SI・2603SIは、20C区北東で重複して検出された竪穴建物跡である。上層から、対辺間約4.7mの隅丸方形の2093SI、長軸約3.7m、短軸約2.9mの楕円形の2597SI、長軸5.8m以上の楕円形の2603SIが重なる。明確な主柱穴は確認できず、遺構外縁部に並ぶ土坑が壁柱列を構成したものと推定される。現地は南向する斜面部にあたり、また東側には土石流の流路となる谷地形が迫っているため、2093SI、2603SIの南～東側は削平により掘方の外形が復元できない。また、谷地形の肩のラインに沿うように幅40～70cmの溝状遺構2094SDが検出された。土層断面の観察の結果、2597SIの利用開始と同時か、存続期間中に掘り込まれている。2597SI床面からの深さは60cm程度で、用途は不明であるが、何らかの水利施設である可能性が考えられる。

埋土の上層には近世陶器が少数含まれ、床面付近では灰釉陶器が複数点出土し、下層に広がる縄文時代包含層に由来すると思われる土器も少数出土した。本遺構は灰釉陶器の時期の建物跡と推定され、いずれにも9世紀代後半～10世紀代前半の年代が与えられる。

土坑列

6基の小土坑が連なる2903SAでは、東から二番目の2073SKで銅銭が複数点出土した。銅銭には祥符元宝、洪武通宝、永楽通宝が含まれ、中世末期～近世初頭の遺構と思われる。明瞭な柱痕跡は見られないが、後述の柱穴列と同様に土留めの柵であったと想定される。

柱穴列

2901SA、2902SAは、どちらも柱穴5基が直線上に並ぶ遺構である。両者は南北に並び、掘り方、柱痕跡の規模も類似するが、軸方向が異なるため建物を構成したものではない。南側の2902SAで確認された柱痕跡の直径は最大で35cm程度である。付近から近世陶器や内耳鍋が出土することから、近世の遺構と考えられる。山からの斜面の中に作られた細長い平坦面上であり、土留めの柵などが設けられた跡と考えられる。

２０Ｃ区西端部の遺構群

20C区西端部には、基盤層まで削り込んだ平坦面が造成されており、土坑のほか、柱穴列2904SA、2905SA、2906SA、2907SA、掘立柱建物2908SB、2909SBが検出された。2908SBでは、建物を構成する柱穴のうち３基で板石が出土しており、柱の支えとして設置されたものと考えられる。2904SA、2905SA、2909SBは軸方向が一致し、平行して並ぶ2906SA、2907SAは建て替えによるものと見られる。切り合い関係を含め整理すると、西端部の遺構は2908SBとそれ以外の2時期に分けられ、前者は後者の廃絶後に建設されている。内耳鍋、擂鉢等が出土することから、近世の遺構群と推定される。（河嶋優輝）

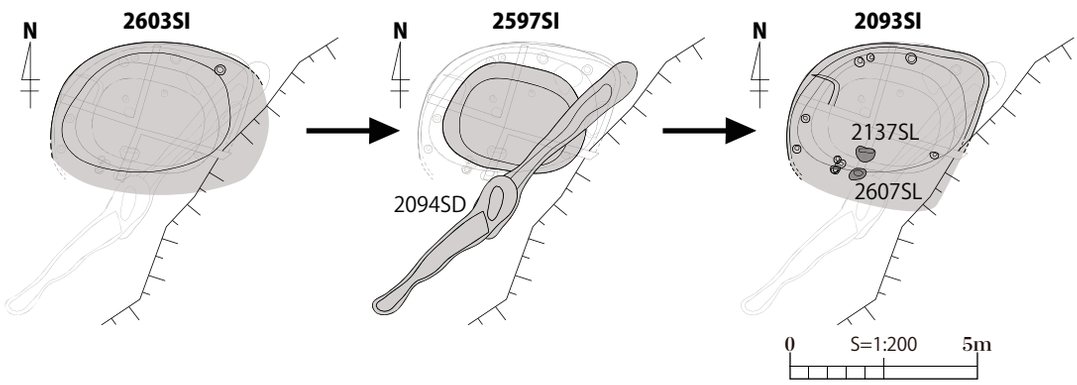

図８　20C区古代竪穴建物跡の変遷

２０Ｃ区

調査区北東側では、古代以降の包含層下に、先史時代の包含層を上下２層で確認した。

縄文時代

上層は黒褐色粘土層で縄文時代晩期～弥生時代の遺物も包含する層である（C層）。掘削中に橿原文様を有する石棒石刀類も出土した。その下には、やや赤みを帯びた黒色粘土層が広がっており、縄文時代中期後半から後期中葉・八王子式までの遺物を包含していた（D層）。C層およびD層を掘削したところ、縄文時代後期前葉（福田K2式併行）を主体する、集落跡を検出した。集落は竪穴建物跡と貯蔵穴と思われる土坑群、さらには柱穴列によって構成されていた。これらの集落は、南西方向に向かって傾斜する斜面の鞍部で展開していた。

貯蔵穴群

竪穴建物跡

竪穴建物跡2703SIは、隅丸方形を呈するプランで、中央に地床炉をもつもので、柱構成は壁柱であったと考えられる。この建物跡に先行する同様の落ち込みが最低２箇所確認することができており、これらも同じ場所に繰り返しつくられた竪穴建物跡の可能性が高い。隣接する位置で見つかった、2740SIは上層に大型の角礫が大量に廃棄されていたもので、掘り方底面で炉跡を検出した。炉跡の場所は、埋土掘削過程で、側面立ちする焼けた板石が存在していたことから、石囲炉跡であった可能性が高い。柱構造は不明であるか、主柱穴構造であった可能性が高い。その柱穴の候補と考えられる一土坑からは、後期前葉の土器がまとまって出土した。

（川添和暁）

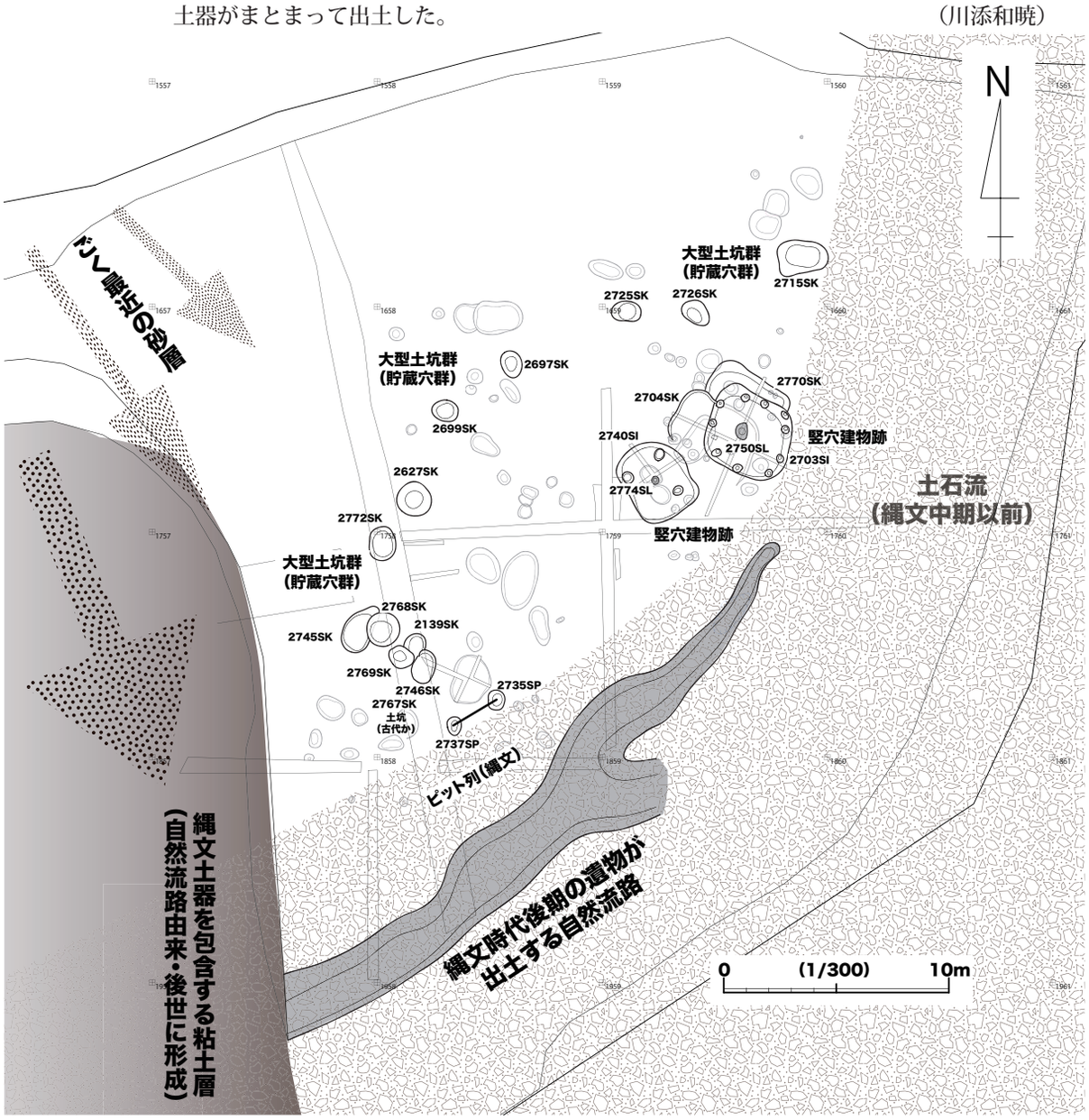

図９　20C区縄文時代遺構位置図（S=1/300）